

来たれ！ 開拓者

美しい村開拓協議会設立

美麻地区存亡の危機迫る

合併から4年目、樂觀できないのが『人口減少』です。独自推計によると44年後の2053年には美麻地区は無人となってしまいます。自分たちの子、孫のためにも何とかせねば！『美麻の将来に何が必要か考える』時がいつに来たようです。

そこで、昨年までの活動を発展させた地域活性化策を農林水産省のモデル事業（平成20年度農林水産省の農山漁村地域力発掘支援事業）に企画提案したところ、事業採択され、国の支援を受けて計画策定が始まりました。しかし、人口1000人を分母で考えても

出るのは後ろ向きな意見ばかり。「自分たちの心の中にこそ開拓すべき未来がある」と気付いた時、発想は大きく転換しました。

ふるさとづくり計画策定

定住人口、交流人口（観光客等）、二地域居住人口、情報交流人口を美麻地区の人口と位置付け、交流人口増加、伝統文化継承、農村風景・農地の再生、産業振興を通じて、定住人口を増加させる5年間の実施計画（美しい村開拓団入植プロジェクト）を策定しました。

事業内容の検討では、参加者が楽しめる事業にしようと様々なアイデアが出される中で、地域の交流の場として朝市を開催しては？名前が美麻市（イチ）にしよう。でも美麻市（シ）と間違えるかも。それも笑える噂として



あしたのまち・くらしづくり活動賞を受賞



この賞は、公益財団法人あしたの日本を創る協会などが主催する地域が直面するさまざまな課題を自らの手で解決して、住み良い地域社会の創造をめざし、独自の発想により全国各地でくらしづくり・ひとづくり活動に2年以上取り組み、大きな



成果をあげて活動している団体に与えられる賞です。美麻地域づくり会議の発足から、5年間の活動をレポートにまとめ応募したところ、全国からの応募総数215編の中から、内閣総理大臣賞、内閣官房長官賞、総務大臣賞に次ぐ主催者賞を受賞することができました。受賞の理由として、合併以後の様々な取り組みを通じて、住民自らが、今後どうすれば「美麻が元気になるか」「住んでみたい美麻づくり」ができるか、を常に考えていること。もうひとつは、「情報の収集・発信」で美麻Wiki、広報美麻づくり通信等広報活動を高く評価いただきました。

活用しよう。などとして、人口3万人の大町市（シ）内に交流人口5万人の美麻市（イチ）を設立することが決定しました。残念ながら農山漁村地域力発掘支援事業は、国の事業仕分けの対象となり、平成22年度以降執行停止となったため、自主運営でプロジェクトを継続することになりましたが、そのことは、将来に向けた地域の力を蓄えることにつながりました。



記念誌の本文（平成22年度まで）は、活動賞の応募レポートを再構成した内容です。

2010 (平成22年)



美麻市

(いち)

美麻市誕生



135回目の誕生会

明治8年の村政施行から135年目にあたる平成22年4月1日美麻村誕生を記念して、135cmの巨大雪像ケーキで誕生会を祝いました。源流美麻太鼓太鼓で開会し、合津初代市長(いちちちょう)の誕生宣言、シンボルマーク「市章(いちしやう)」の発表、記念の紅白おやきのプレゼントがありました。市(いち)章は公募により行い、38応募作品の中から、美麻中3年の平井秋帆君の作品が



平井君のコメント：美麻大塩に伝わる樹静の桜をイメージして、デザインしました。美麻がもっと楽しくぎやかになればうれしい。



最優秀賞に輝きました。平井君には、第1号の市民証とオリジナルエコバッグ、副賞のお米135kgが贈呈されました。



臨時市(いち)役所の窓口では、市(いち)民票の発行に長蛇の列。

第1回 美麻市開催

4月4日、数百人の市民が集まる中、大町市長を来賓に迎え美麻市の開市式典が行なわれました。スイトン汁の無料配布があり、源流美麻太鼓子ども会の演奏、市長(いちちちょう)の開催あいさつ、牛越大町市長から

はお祝いの言葉をいただきました。市には農産物をはじめ、地元産小麦粉のうどんやカレー、コーヒーの屋台、大北農協からの出店もあり、大いに賑わいました。臨時市役所の窓口では、市(いち)民登録が行なわれ、この日、美麻の人口は5.1%も増加しました。

2011 (平成23年)

学社融合プロジェクト

総合学習「美麻市民科」始まる

共に学ぼう地域と学校

美麻中学校では、平成22年度より美麻地区をテーマに中学生が地域の魅力を発掘、発見しPRすることを総合的な学習の時間で取り組んできました。



美麻の宝・再発見

指導いただいている長野大学の先生は、企業情報学部の池田諸苗教授（メディアアプランニング論）と馬在勇教授（情報デザイン）のお2人です。
地域づくり会議では、ホームページを活用しての広報や情報交換のほか、学習テーマに合わせて住民講師の派遣など、生徒と地域の橋渡しを中心に協働で事業を実施しました。

総合的な学習として1年間実施してきた協働事業が「美麻の宝再発見」として中学生の手によってまとめられました。
長野大学の先生方にデザインとプレゼンテーションについて継続的な指導をいただきながら毎日にテーマを決めて中学校全体で取り組んだ成果は梨の木祭や美麻地区文化祭でプレゼンテーションや寸劇などで発表されました。3年生はプレゼンテーションに加え地域の

美麻地区ガイドブック「美麻解く本」として発行

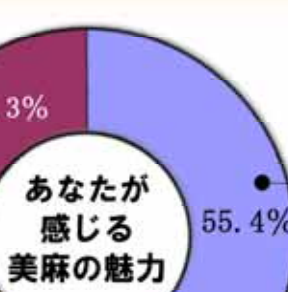


PRポスターも作成するなど大人が気づかなかつた地域のお宝（魅力）を文字通り再発見できたようです。

2011 (平成23年)

移住・定住促進に着手

初年度の取り組みとして、先進地視察を通じて、移住希望者向けガイドブックを作成することとしました。作成にあたり、地区内の中学生以上の方を対象実施したアンケートには、325人から回答いただきました。お寄せいただいた意見は、移住ガイドブックに盛り込み活用させていただきます。



2011 (平成23年)

育 食 の 地 域 始 末

シビエ+学校=食育×地産地消

シビエ給食始まる

美麻市民科に始まった地域と学校の連携は、総合学習に限らず、多様な広がりを見せるようになりました。
「いただきます。」と元気な声がランチルームに響きます。12月12日の給食のメニューは子ども達が大好きなカレーです。でも、この日のカレーは一味違いました。使われているお肉は、地元で獲れた日本鹿の肉。昨年、湯の海に中信地区初の野生鳥獣の処理加工施設「美麻シビエ工房」を作った美麻シビエ振興会の皆さんが、子ど

も達に自然の恵み、命の大切さを知ってもらおうと学校に提案して実現されました。
当日は、新聞やテレビの取材も多くあり、とてもにぎやかな給食となりました。
シビエ給食の実現には、市教育委員会の理解に加え、給食の先生も普段の何倍も手間をかけて調理されたとのこと、関係された皆様に改めて感謝申し上げます。

きょう給食でシビエカレーが出ました。シビエカレーに入っていたシカ肉は、グニョッとしていたけれどとてもおいしくて、あと2〜3ばいくらい食べられそうでした。(小2 巻田陽也)



有害鳥獣から地域を守る



シカやイノシシの被害が増え、猟友会は市から駆除を委託されていますが、捕れたものを利用するには『衛生的で合法的な山肉の処理』が必要でした。そこで、平成24年に猟友会が中心となり、『シビエ振興会』を結成し、長野県の地域発元気づくり支援金を活用して、中信地方初の狩猟肉の解体・加工施設「美麻シビエ工房」が農業者トレーニングセンター隣に完成しました。

総合学習への活用

シビエ給食の他にも、イワナ給食など、地域の食材が給食のメニューに取り入れられたほか、総合学習のテーマとしても活用されるようになりました。



総合学習でシビエをテーマとする班も



イワナを使った調理実習

地域の自立と活性化に向けて

美し村(うましさと)サイコー
(再考、再興、最高!)プロジェクト

平成25年度の事業開始にあたり、地域活性化を具体的に進めるため、国(総務省)の平成24年度補正過疎集落等自立再生緊急対策事業に応募し、全国から600件を超える応募が寄せられる中、美麻地区が地域課題として継続的に取り組んできた内容を具体化した事業提案評価評価され、地域活性化を推進することとなりました。

- 1 移住定住促進
- 2 ブランドデザイン
- 3 伝統文化継承
- 4 若者交流人口獲得
- 5 魅力ある学校づくり

過疎集落等自立再生緊急対策事業

過疎集落等を対象に、地域資源や地域産業を積極的に活用して地域経済の活性化を図るとともに、日用品の買物支援といった日常生活機軸の確保などの課題に総合的に取り組む。

取り組みのポイント

- 拠点施設整備等のハード事業や住民主体による持続可能な仕組みづくり等のソフト事業を一体的に実施
- 地域経済を支える中小企業・地元小規模事業者への受注を促し、地域経済を活性化

過疎の集落と生活圏



施策の概要



移住定住促進事業

定住人口増加を目的に、入居者のいなくなった二重(湯の海)地区の教員住宅2戸を定住促進住宅に転用する住宅改修を実施しました。



合併後、長い間住む人のなかった教員住宅が、地域振興住宅として活用できるようになりました。

魅力ある学校づくり

平成26年度のコミュニティスクールへの移行に向けて、地域と連携した事業として、メンドシーノ交流事業とあわせて和太鼓製作ワークショップ、麻文化継承の麻掻き体験を実施するなどの取り組みを行いました。



交流を深めるデザインが施された太鼓はメンドシーノへ送られ、前回の太鼓と合わせて、訪問時の演奏が可能な数が揃いました。



地域の人を講師に迎えての麻文化を伝えるワークショップにより、学校と地域の連携を深めました。

美麻ブランドデザイン

花豆を地域の特産品開発として開発する事業や、地域のゆるキャラ開発を行う事業に着手しました。



地域づくり会議で研究、検討してきた花豆の栽培や商品開発を学校と連携して実施しました。



これらの事業に伝統文化継承、情報発信、交流人口獲得などを絡めて事業効果を高めました。事業の実施により、地域づくり会議と学校の活動連携が緊密となりました。事業成果が数年後に具体化することは、誰も想像しませんでした。